

## 匈奴の称号単于について

『長田夏樹論述集（下）』第35章  
(原載：『水門一言葉と歴史』第17号, 1992年2月)

秦漢時代の中国を脅かした北方民族「匈奴」の首長の称号「単于」について、その語源と系統を考証したもの。「吐谷渾」「匈奴」「可汗」「鄯善」などの固有名詞についての考証もなされている。最初に詩詞・変文・元曲に見える「単于」への言及があるのが通俗文学にも造詣の深い長田先生らしいところである。

本論では、まず漢魏の時代がなお上古音の段階に属することを論じ、清朝考証学者の「古無舌上音」の説によりつつ、『戦国策』や『史記』に見える「単于」の上古音を *djhan-ɣjwa* と再構、『漢書』「匈奴伝」の「撐犁孤塗單于」を、*djhang-li kwâ-dhâ djhan-ɣjwa* と復元、「孤塗」（ともに中古模韻）を「子供」を意味するツングース語の *kutu/gutu* につなげることの不可なることを指摘、モンゴル語の *tngrɣ qadaɣalaqu daruɣa* すなわち「天の守護し給う首長」と解釈している。なお同じく『漢書』「匈奴伝」に見える「護于」を、のちの「可汗」に相当するものと想定している。

ダルガ (*daruɣa*) またはダルガチ (*daruɣači*) はモンゴル帝国の官職。地方の行政長官である。『元典章』では「達魯花赤」などの漢字表記がなされる。

単于＝ダルガ説としては E.G. Pulleyblank, 1967 の以下の文が時期的に早いものと思われる。

The same character appears in a number of Hsiung-nu words. Two of these will be discussed in the Appendix, 單于 M. *jiēn-fj̄ou < dān-fiwāf̄* and 護于 M. *fiou'-fj̄ou < fiwax-fiwāf̄*, in which it is proposed to see the ancestral forms of Turkish *tarqan/tarxan* and *qaran/xayan*. Though we have no direct knowledge of Hsiung-nu phonology it may be conjectured that underlying forms were something like *\*dāryā* or *dāry<sup>w</sup>ā* and *ɣayā* or *ɣ<sup>w</sup>ay<sup>w</sup>ā*.

この説は W.Baxter、鄭張尚芳、潘悟雲などの諸氏も賛同していて、中国語学では定説化した感がある。しかしながら東洋史の研究者には必ずしも受け入れられていないようである。

四日市康博氏の教示によれば、モンゴル語の *daruɣa* はトルコ語 *basqaq* に対応、どちらも語根の *daru-* / *bas-* に「押す」という意味があり、*daruɣa* / *basqaq* とは「(印を) 押させる者 (-*ɣa* は使役形接尾辞)」であるとする説が通説となっているという (P. Pelliot, 1949. *Notes sur l'histoire de la Horde d'or*. Paris, pp.72-73, n.1)。そして、モンゴル帝国初期にはハンの御璽で

あっても、ハン自らが持たずにジャルグチ・ビチクチ・ダルガチが管理していたので（『黒韃事略』による）、ダルガという語が「長官」を意味するのはよいとしても、「単于」すなわち首長（「ハン」）自身にまで遡るといふ説は受け入れがたいのではないかということである。

タクラマカン砂漠の古代仏教都市として有名なダندانウイリク Dandan-oilik の Dandan が音の面から「鄯善」と結び付く可能性を指摘していることからわかるとおり、長田先生は歴史研究にも精通しておられた。紙幅の関係でカットされた「突厥文字テュルク語の Tarqan、パспа文字モンゴル資料の darugas などについて」の議論を含め、歴史面での議論をもっと拝読したかったものである。

#### 参考文献

E.G. Pulleyblank. 1967. The Consonantal System of Old Chinese, *Asia Major* 9-1.

（古屋昭弘）